

## 逝く春の歌（歌）：文苑

著者	下林，一之
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 6
ページ	7 6 - 7 6
発行年	1912-06-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6377">http://hdl.handle.net/2298/6377</a>

旅に出で、雨よひ空の川床に群るゝ鴉の羽音を聞きぬ  
歌はんと思ひし男何時迄も歌はで人をいたくいらだつ  
阿蘇の山小雨降る日は遠くより静寂の野を底鳴り渡る  
黄色なる阿蘇の裾野に立つ人を烟の影の静かににる

## 逝く春の歌

は  
じ  
め

舷によりて霞の中に違がなるなづかしの人の家みる心  
小雨ふるたぼろ月夜の大公孫樹もの思ふ子を夜鳥のなく  
眠られずに家傳の藥つく槌の音聞きく夜半を春の雨ふる  
「目よなごてひなげしこのむ」その花の紅なるがやがてしほめば  
春の夜の湯殿にけふるランプをばうるはしと見て瀨の音を聞く  
蕨狩の歸さにふとも瀧見にと球磨川べりの林わけゆく

## 熱 涙

なほ熱き涙ながれぬ只茫と春の最中の帳のうちに

し  
づ  
か